「サラの死と埋葬」（創世記二三章一～二〇節）

1　サラの死

先週私どもの学んだイサク奉献の出来事、これが、アブラハム物語の、内容的にも形式的にもクライマックスであったことは、ご一緒に学んできて、皆さんもそうお感じになっておられると思います。

内容的にも形式的にも、と申しましたが、内容的に言えば、アブラハムが試練に逢いながらも、結果的に独り子イサクを失わないで済んだということ、つまり神の祝福の担い手が確保されて、いよいよ神の民イスラエルの歴史が始まる、条件が整ったということです。

形式的には、イサク奉献のことが終わって、今日の聖書、二三章でサラの死が、次の次の章ではアブラハムの死が伝えられます。つまり物語は終わりに向かっているということです。こうした続き具合からしても、イサク奉献が頂点であったことを改めて知るのです。

さてサラがイサクを産んだのは九〇歳のときでした。サラが死んだのは一二七歳です。サラがイサクと夫アブラハムと、晩年の、きっと幸福な生活をいとなんだのは三七年間ということになります。ハガルとイシュマエルが家を出てからはおよそ二〇年間です。

三七年にしても二〇年にしても、長い年月です。しかし何の心配もない、どんなに幸福な生活であったとしても、人は決して死を免れない。サラの死んだことが、今日の箇所、最初の一、二節に伝えられています。

> サラの生涯は百二十七年であった。これがサラの生きた年数である。サラは、カナン地方のキルヤト・アルバ、すなわちヘブロンで死んだ。アブラハムは、サラのために胸を打ち、嘆き悲しんだ（一～二節）。

サラの生涯を少し振り返ってみます。彼女はアブラハム自身が言っているようにアブラハムの腹違いの妹でした。アブラハム一族のもともとの出身地、「カルデアのウル」（一一・二八）、ユーフラテス下流の町ウルの時代に、アブラハムと結婚します。アブラハムがハランに移住したときも、そこからさらに神の命にしたがって七五歳のときカナン地方に向かったときも、「行き先も知らず」（ヘブライ一一・八）「さすらいの旅」（二〇・一三）に出たときも、アブラハムと一緒、労苦をずっと共にしてきた女性です。

性格は一方でとても従順な女性だったと思います（一ペトロ三・六）。例えば、覚えていらっしゃるでしょうか、アブラハムがゲラルに滞在していたとき、ゲラルの人たちを恐れてアブラハムが妻サラに、「わたしに尽くすと思って、どこへ行っても、わたしのことを、この人は兄ですと言ってくれないか」（二〇・一三）と頼んでいます。そう言ってくれれば助かるというわけです。男の身勝手な頼みと言えば、そうですけれど、ともかくそれに従っています。

他方、彼女の召し使いハガルとの関係で言えば、きわめて人間的な側面を見せていました。本来よかれと思って、ハガルによって子を得るようアブラハムに勧めたわけですが、子供ができたと分かると、嫉妬に苦しみ、結局、ハガルとその子イシュマエルを追い出すことにもなります。

長い人生です。実際、いろいろのことがありました。彼女を、しかし新約聖書はとても高く評価しています。サラに言及している箇所は多くありませんが、その中でヘブライ人への手紙はこう言っています。

信仰によって、不妊の女サラ自身も、年齢が盛りを過ぎていたのに子をもうける力を得ました。約束をなさった方は真実な方であると、信じていたからです（一一・一一）。

「信仰によって」、「信じていたからである」と、ヘブライ人への手紙は言っています。これを読んで、私は少しサラを厳しく見過ぎていたかも知れないと反省しているところです。アブラハムの笑い（一七・一七）を信仰の笑い、サラの笑い（一八・一二）を不信仰の笑いなどと講壇で言ったような気がします。一つ一つの行動をそれだけ取り上げて見れば、そう言えることがあるとしても、人生を通して見ると、そうしたことはだれにもあること、むしろ小さなこと。神がサラを愛し、サラもその立場において信仰によって懸命に生きた、この大きなことが、いつまでも残ります。「アブラハムはサラのために胸を打ち、嘆き悲しんだ」。これ以上にサラの信仰の生涯をよく証しするものはないと言ってよいように思います。

2　マクペラの洞穴

今日の聖書箇所は、サラの死を厳粛に伝えながら、これを葬る（埋葬する）、というところに重点が移って行っています。

サラが死んだのはヘブロンです。「キルヤト・アルバ」というのは、その古い地名です。

そこはアブラハム一族が長く住んだところです。しかし、言うまでもなく、その場所は自分たちの町でも、土地でもありません、半遊牧民の彼らの生活様式は基本的に寄留です。今日の聖書箇所、その大部分は、アブラハムが、その寄留地でどれほどていねいに交渉し、サラを葬るための土地を買い取ったか、所有するに至ったかを示すのに当てられています。

アブラハムは、墓地にしたい場所をはじめから決めていたようです。後で出てきますが、マクペラの洞穴です。マクペラというのは、重なったという意味で、中が枝分かれした、あるいは上と下、二つに分かれた洞穴で、墓地としてとてもよいものだったと思われます。

今日の箇所は、「町の門の広場」（一〇節）でなされた、譲渡ないし売買のための正式の交渉の様子を伝えています。交渉は二段階でなされています。はじめはアブラハムとその町の人々、「ヘトの人々」との間です（四～九節）。次いでマクペラの洞穴の所有者エフロンとの間です（一〇～一八節）。

エフロンが持ち主であることをアブラハムはもちろん知っていました。直接交渉するのではなく、はじめにヘトの人々に、亡くなった妻を葬ってやりたいので、墓地を譲ってもらいたい、この願いは人間として正当で許されるものであることを訴えます。このアブラハムの願いをヘトの人々が受け入れたとき、エフロンも受け入れざるをえないものとなるからです。

エフロンは、最初、洞穴も畑も差し上げようと言ったりしています。じつはこれは交渉術で、エフロンはなるべく高く売りたいのです。アブラハムは必ず代金を払って買い取るはず、それを見越して、値段をつり上げるための作戦だったようです。

最終的に、銀四百シェケルでアブラハムは買い取ります。法外に高い値段だったようです。しかしアブラハムはそれを受け入れます。エフロンはしてやったりと思ったでしょうけれど、反対にアブラハムも、こうして確実に墓地を手に入れることができたのです。最後のところだけ再読して確認しておきましょう。

> アブラハムはこのエフロンの言葉を聞き入れ、エフロンがヘトの人々が聞いているところで言った値段、銀四百シェケルを商人の通用銀の重さで量り、エフロンに渡した。こうして、マムレの前のマクペラにあるエフロンの畑は、土地とそこの洞穴と、その周囲の境界内に生えている木を含め、町の門の広場に来ていたすべてのヘトの人々の立ち会いのもとに、アブラハムの所有となった（一六～一八節）。

こうした交渉過程で私どもに印象深いのは、一つは、アブラハムの、いわば低姿勢です。もう一つは、それとも無関係ではないかも知れませんが、ヘトの人々のアブラハムに対する、いわば尊敬です。

十分説明する余裕はありませんが、「低姿勢」で言うと、例えば、アブラハムははじめから自らを「一時滞在する寄留者」と規定し、「譲ってください」「お願いを聞いてください」と言いつづけます。「人々に挨拶をし」（七節）は、ひれ伏す（聖書協会共同訳、岩波）です。そして法外な値段、エフロンの提示金額をそのまま聞き入れています。

他方アブラハムは、土地の者たちからも権威ある者とみられていたのです。「あなたは、わたしどもの中で神の選ばれた方です」（六節）。「神の選ばれた方」は「神のような主君」（口語訳）、「神のように優れたお方」（聖書協会共同訳、岩波）とも訳されます。これまでも、たとえばゲラルでも、何をやっても神がついている人として見られていたように、ここでも、アブラハムの、異邦の人々に対する態度は、堂々として権威があり、しかも謙遜で、まことに立派なものでした。こうしたことがこの交渉を成功させた隠れた要因になっているように見えます。

3　希望のしるしとしての葬り

先に私は今日の聖書箇所は、サラの死を伝えながら、これを葬る、というところに重点が移って行っていると申しました。ただそれは葬りのための場所を確保するという物理的なことに移って行ったということだけではありません。そうではなくて今日

の箇所の終わり近くにあるように、葬ることへと移って行ったのです。

その後アブラハムは、カナン地方のヘブロンにあるマムレの前のマクペラの畑の洞穴に妻のサラを葬った（一九節）。

この「葬った」という最後の言葉から、今日の箇所の最初の言葉、サラの死に接したアブラハムのことをもう一度思い起こしてよいと思います。

アブラハムは、サラのために胸を打ち、嘆き悲しんだ。アブラハムは遺体の傍らから立ち上がり、ヘトの人々に頼んだ。・・・（二～三節）。

「遺体の傍らから立ち上がり」。非常に印象深い言葉です。アブラハムは遺体の傍らにいつまでもいることはしなかったのです。死んだ人が帰ってくることはもう決してないからでしょうか。そうかも知れません。いやむしろ、アブラハムは、死んだ人を葬るために立ち上がったのです。

死者を葬る、これは何も聖書だけのことではありません（但し聖書ではここがはじめて）。そもそも、先ほど見たように、アブラハムは葬ることについて、ヘトの人々にも理解してもらえるという思いで、墓所を譲ってくれるよう彼らに訴えかけていたのです。カルヴァンは創世記註解で、葬りが、どの民族にもあって、それが消滅しないのは、人々が来るべき世の命について考えていることの証しだというのです。その上で、アブラハムは心のうちに深く復活の希望をもっていたために、「復活の目に見えるしるし」を、それにふさわしく熱心に重んじ、葬りとその場所の確保にこだわったのだと書いています。

カルヴァンがここで復活を持ち出すのは、少し驚きですが、葬りということは、たんに土に返す、ということではありません。復活の備えをするのだというのは示唆に富む理解です。

使徒信条を私どもは思い出してもよいと思います。「死にて葬られ・・・」。イエスが死んだことと、葬られたことは、一つづきだけれど、別の事柄です。そしてそれは「死人のうちよりよみがえり」につながっていきます。葬ることに復活につづきます。アブラハムはそれを予感していた（カルヴァン）。来週、私どもはちょうど墓前礼拝、納骨式を行います。死んだ人を葬り、その復活の備えをする、そうした思いの中でなされることを願っています。

さて今日の箇所、もう一つの側面のことを最後に申し上げておかなければならないと思います。

神の約束は、アブラハムを祝福の基とする、言い換えれば、神の民イスラエルを歴史の中につくり出すということでした。イサク誕生はそれに向けての大いなる一歩でした。もう一つ、いま墓所という形で、アブラハムは土地を所有します。神の民イスラエルが地上に形成される、その足がかりができた、小さいけれど、その一歩が踏み出された、そのことも私どもがここで確認しておきたいことです。

（二〇二〇・一〇・二五）